

## テニスと就職 ～鶴の一声～

熊谷 一彌

大正6年の5月に東京芝浦の埋立地で、第3回極東選手権大会が催されることとなった。

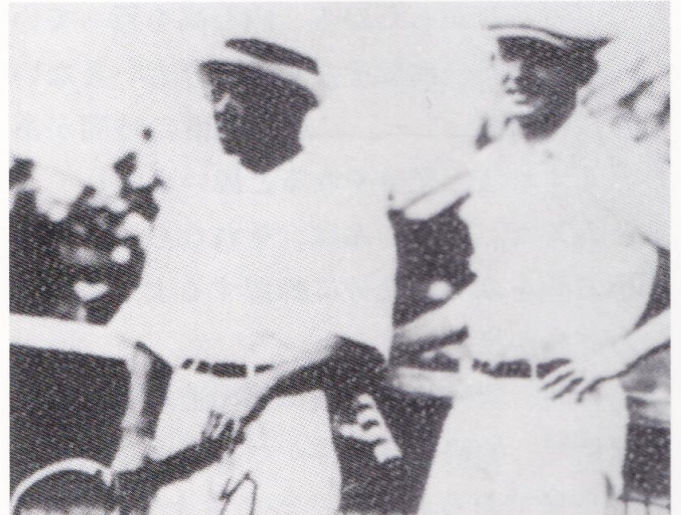
この大会にテニス選手として出場してほしいという声は、それとなく私の耳に入っていたのであるが、ホヤホヤの新入社員がたとえ理由があったにせよ、勤務を休んでまでやるべきではないと思ったし、また入社初年度には有給休暇もない内規なので、気は進まなかった。

仮に出場したところで試合の相手は中国とフィリピンの選手で、彼らとはすでにテスト済みで、勝つに決まっていたようなものだから、どの点からいっても参加は気乗り薄だった。

ところがいよいよ開会も迫った3週間ほど前のある日の午後、突然私は合資会社（その頃「三菱」は一つ一つの部門が現在のように独立しておらず、一つに総括されており、その下で各部門に分かれていた）の重役食堂に罷り出るようにとのお達示があった（このように古風な言葉を使いたくなるような当時の雰囲気であった）。

新米の白面の、いや黒面の下っ端野郎に特別のお声がかかりがあることさえ解せないのに、それが重役食堂に出頭しろというのである。それがどこにあるのかさえ皆目分からず、とも角多少おっかなびっくりしながら給仕に導かれてドアを開けて中に入った。

食堂には岩崎小彌太社長中心に、合資会社の大幹部クラスの重役方が3、40人ずらりと綺羅星のごとく着席しておられる。何か新しい芝居の舞台でも見ているようなあんばいで、ちょっと度肝を抜かれた。



1916年 米国ニューポート・トーナメント  
全米1位ウィリアム・ジョンストン氏（右）を破り優勝

何か定例の昼食会の後だったようで、食後の雑談の最中だった。そんなお偉方ばかりの場にでくわしたことの無い若者は、緊張で固くなって、何で呼び出されたのだろうと、多少不安な気持で立っていた。

社長を初め、重役方の好奇の目が一斉に私に集中した。温厚そのものといった串田さんがまず最初に口を切られた。福德円満という言葉は全く同氏のために作られたみたいで、私は尊敬もし、また親しみの念を懐いていた。そしてこの人の下で働いていることをどんなにかありがたく思っていた。その串田さんが、温情あふれる言葉で、今度芝浦で催される極東選手権大会に、大日本体育協会の嘉納治五郎先生から、君を庭球選手として出場させたいからぜひ許可してくれるようにという申請が来ている。社長のご意見もうかがったが、国家のためになることだから本社としては快く承諾することにしたのだが、君は出場して勝つ自信があるか、という仰せなのである。

先にもちょっと触れたように、今度の相手は以前マニラや上海で顔が会い、よく手のうちの分かっている選手連だし、一方私の方は、その時に比べたら、アメリカでの経験も数々積み、当たりも出ている最中だったから、彼らと手を合わせても、鎧袖一触だ位の意気込みで、まだ若かったから、内心高を括っていたが、お歴々の前でそんな強がりもいえないから、内輪に、「一、二週間練習の時間がありさえすれば、充分やれると思います」

と答えた。串田さんは、それならば銀行の仕事の暇をみて、十分に練習するように、とのお許しがした。

その間、岩崎社長は誠に悠揚迫らざる長者の風格で、始終微笑を浮かべて頼もし気にこちらを見ておられたが、後で考えてみると、練習の許可位は銀行内で済むものを、わざわざ呼び出したのは、近頃テニスで有名になった熊谷という男がどんな奴か一度見てみよう、かくは首実験と相成ったものらしい。

私は委細承って引き退ったのであるが、つらつら思案するまでもなく、先の2月の出来事からわずか2ヵ月しか経っていないのに、何と幹部の態度の変ったこと、その好転ぶりはただただ驚くばかり、どう考えてもこの短期間に幹部のスポーツに対する頭が切り換えられたはずもないから、これは岩崎社長の“鶴の一声”でトントン拍子にことが運んだとしか考えられない。事実、日本大財閥の正横綱、三井、三菱と並称されているうちでも、岩崎社長は良い意味でのワンマン的というのか、一段とズバ抜けたオールマイティー的存在といわれていた。だから私が、この重役食堂に「伺候」した折にも、いかに鈍感な私にも、この雰囲気というか、一種のムードが何ということなしにピーンと伝わってきたのだ。

ただしそれは暴君的な威圧感ではなく、何か無限の安堵感といったものを与えられ、コチョコ

チに小さくなっていた私は、いつの間にか少しずつ楽な気持ちになって部屋を退いたのだった。この鶴の一声がやがて翌年には私をアメリカ勤務に格上げさせ、自由にテニスで活躍し、物心両面から特別の庇護を惜しみなく与えられるところまで発展しようとは、神ならぬ身の知る由もなかった。

このオールマイティな岩崎社長は、音楽家の山田耕筰さんが有名なカーネギー・ホールでデビューされる時など、確か当時の米貨で三千ドルを贈られた。私がニューヨーク在勤のとき、銀行の山室支店長の命で記帳したことを記憶している。その他にもそれが広い意味で日本国家のためになると了解されると、全く求むるところなく、快く相当巨額のを寄せられたことを再々知っている。

私の場合も、下っ端の一社員だから多少違うところはあったにせよ、煎じつめれば、やはりこのような場合と軌を一にしていたものだろうと思う。

さて、話を元に戻して、この試合のために一週間程度の練習を積んだ後、芝浦会場の新設コートで対戦し、簡単に単複共に優勝した。かくて岩崎社長のご期待にいささかお応えすることができた。

試合中は花形でも、1日終わればまた一介の平凡な若造の腰弁生活に戻り、漸く見習いの2、3ヵ月が過ぎ、為替係に決まったポストを与えられたから、忙しいことも一通りではない。日曜日のテニスを楽しみに、銀行員として丸の内通いを繰り返していた。

そのうちにもテニスの熊谷の名が段々と大きくクローズアップされてくるものだから、他の会社から好条件で誘いの手が伸びてきたが、その都度、あの時の岩崎社長の温顔と微笑が目には浮かび、また特別のご好意による入社のことを思い、遂にその誘いの手には乗らなかった。(『テニスを生涯の友として』熊谷一彌遺稿集)